



料金後納

ゆうメール

(株)育脳寺子屋MAC 本部教室 MAC真成塾
〒616-8156 京都市右京区太秦西野町20
電話:(075)871-0374 FAX:(075)882-3777

2016年
1月号

Mathematics Abacus Chinese character

MAC NEWS

お子さんが大人になった時、社会で活躍できるヒントがいっぱい！！

将来的に活躍できる子って！？

先日、娘が通う幼稚園でイベントがあったので参加してきました。そのイベントで園長先生の講演があったのですが、その内容がなかなか興味深いものでした。

それはノーベル経済学賞受賞者、ジェームズ・J・ヘックマン氏の発表した「幼児教育の経済学」についての話です。簡単にまとめますと、ヘックマン氏の主張は以下2点です。

- ① 認知的能力（学力）は将来の年収とは関係なくて、非認知的能力の方が大事
【=IQ（頭の知能指数）よりEQ（心の知能指数）が大事】
- ② 幼児期の教育が、一番投資対効果が良い

実は我が子を通わせる幼稚園選びの際、園長先生の考えが自分の教育理念と非常に似ているという理由でこの幼稚園を選んだということもあり、今回の話も「同感！！」な部分が多々ありました。

この話は以前別の本で少しだけ読んだ事があり、今回園長先生の話を聞きさらに深く知りたい・・・と思ったので、早速この本を購入しました！

「幼児教育の経済学」

(東洋経済新報社)



人生で成功するかどうか！？

ヘックマン氏は、人生で成功するかどうかは「非認知的能力」がどれだけ高いかに関係すると言います。非認知的能力とは、**肉体的・精神的健康や根気強さ、注意深さ、長期的計画を実行する力、自信**などといった**社会的・情動的性質**を指します。

この非認知的能力が低いと**仕事を辞める率が高い**という結果が出ています。

では、この非認知的能力を向上させるにはどうすればよいか？様々な要素がありますが「家族（特に母親）との親密なふれあい」が重要とあります。非認知的能力の高い子の母親の多くは、育児に多くの時間を割き、特に情操教育に熱心で、読み聞かせに多くの時間をかけていたということが分かりました。

親の収入や片親かどうかということは大して重要ではなく、上記のような「成長環境の質」が大切だと書かれています。成長環境の質が高ければ、認知的能力（頭の知能指数）、非認知的能力（心の知能指数）両方に好影響を与えとの事です。

学生の間は成績が良ければ『優等生』と言われます。しかし、ずっと学校で人生を歩んでいくわけではなく、やがて社会に出ます。社会では定期テストはありませんし、教科もありません。つまり**テストで高得点を取る為だけの勉強は、将来的にはあまり意味のない事**なのです。知識の詰め込みで認知的能力だけ上げてもあまり意味がありません。

ちなみに、親との親密なふれあいがある子どもと、そうでない子どもの脳を比較すると驚くほど大きさに違いがあります。親との触れ合いが少ないと、脳が委縮してしまいうらしいです…。私も「忙しい」を言い訳にせず、我が子との触れあう時間を大切にしていこうと思いました。

ペリー就学前プロジェクト

上記の考えに至る裏付けとされた実験が「ペリー就学前プロジェクト」です。実験内容は以下です。

- ・就学前の幼児に午前中2時間教室で授業、さらに週に一度教師が家庭訪問し90分の指導をする。内容的には**非認知的能力（EQ）**を育てることに重点を置き、子どもの自発性を大切にす活動を中心とした。

・教師は子供に自分で考えた遊びを実践し、毎日復習するように促した。復習は集団で行い、子どもたちに重要な社会的スキルを教えた。これを30週続ける。

そして、このプロジェクトを受けた子とそうでない子を40歳になるまで追跡調査した。

結果、プロジェクトを受けた子は成績が良く、学歴が高く、特別支援教育の対象者が少なく、収入が多く、持ち家率が高く、生活保護受給率や逮捕率が低かった。

という結果が得られました。

この実験結果を見ると「じゃあ、幼児の頃を過ぎたら手遅れ??」と思われるかもしれませんが、決してそうではありません。別の章では、

「十代になってから子どものIQや問題解決能力を大幅に高めるのは難しい。しかし、社会的スキルや性格的スキルは20歳くらいまでは発展が可能だ。あくまで全体的にバランスよく形成させる為には幼児期が重要なのだ」

とありました。同じ様な内容を提唱されていた別の著者（本の題名は失念してしまいました・・・）も、「将来社会で活躍できるかどうかは子どもの頃のしつけにかかっている。しつけは『つ』のつく年齢（要するにここのつ=9歳まで）にしないといけない」とありました。

MACでは原則、入塾は小3までとしていますが、その理由はこの「しつけ」の適齢期を考えてのことです。

「はい」と返事をする、備品を借りる時は「借ります」、返す時は「ありがとうございました」と言う、授業が終わったら自分の出したごみ（消しゴムのカスなど）は自分で集めてゴミ箱へ捨てる。イスを出したままにしない、整理整頓をする・・・etc、当たり前と言えるルールも『つ』のつく年齢までに体に染みつかせないと、なかなか定着しません。

MACは授業形態が無学年方式で、小1～小6が同じ教室で授業を受けている為、下級生は上級生の姿を見て学ぶ事ができます。同級生だけのクラスにしてしまうと、出来ない事が普通になるので、見て学ぶ事ができません。

実はこの見て学ぶ（たまに、『まねぶ』と表現されたりもします）ということは非常に大事なことで、社会人になれば手取り足とり教えてもらえる事は少ないので、見て学ぶ力のある子は

どんどん仕事を覚え、出世します。

教えてもらっていないから分からない、できない。では、これからの変わり続ける世の中では生きていけません。

私は一般企業で働いていた時、新入社員の指導員を任されたことがありました。

高学歴なのになかなか成長できない子、全く学歴は無くともどんどん色々な事を吸収し、人を巻き込んで大きな仕事をして成長していく子など、様々な子がいました。

これを目の当たりにした時、

「ああ、本当に勉強ができるのと仕事ができるのは別もんだなあ。そうになると、勉強って一体何の為にするのかな」

と真剣に考えた記憶があります。この頃の経験は今の指導に大いに役立っています。

何の為に勉強するか？

それは間違いなく将来社会に出てから必要とされる人材になるため、また社会で活躍できるようになる為です。

多くの塾は目先のテストや入試で良い点を取らせる為、定期テスト対策・入試対策に徹底して取り組みます。つまり塾が頑張りポイントをまとめ、生徒には最小限の努力で最大限の効果を得られるようにしているのです。

これは親御さんや生徒には非常に喜ばれます。しかし、生徒たちの力になっているのでしょうか？そのような勉強に慣れた子は、社会に出てから自ら考え行動できる子になるのでしょうか？

人に手取り足とり助けてもらわなくとも、自分で何とかする力をつけてあげる。

これが私教育の使命だと考えています。MACではこれからも社会に出てから活躍できる子を育てる為、厳しく、優しく、根気よく、子どもたちと向き合っていきます。

小学生の忘れものに関して

小学部では忘れ物（宿題・感想文・その他授業で使用する物）をした場合、授業が受けられずその日は帰ることとなります。当然、その際の振替はございません。

「帰らされる」と聞くと厳しすぎるように感じます。

しかし、帰らせているこちら側も本当に心を痛ませながら、心配しながら帰らせていることをご理解下さい。

「しゃあないなあ。今回だけやで。はいっ」と貸してあげれば楽ですし、こちらもそんな思いをしなくて済みます。が、それをすると全く悪びれる様子もなく「忘れました～貸して下さい～」と笑いながら言うようになります。

つまり「忘れ物をしないようにしよう！」という気持ちが全く無くなるのです。

中には忘れ物をして泣きながら家に帰った子もいます。しかし、その後親御さんから、

「先日は泣きながら帰ってきました。しかし、それ以降絶対に忘れ物をしないように何度もチェックするようになりました。感謝致します、ありがとうございます。」

というコメントを頂きました。

MACでは「社会に出てから活躍できる人を育てる」という思いで日々指導をしています。厳しいようですが、そのルールの中で子どもたちには**決まりを守らないといけない**という勉強をしてもらっています。

失敗をした時が、成長するチャンスなのです。

目先の優しさで子どもたちの成長のチャンスを潰してしまわないよう、このルールは継続致しますので、親御様のご理解とご協力を宜しくお願い致します。

※送り迎えで通塾されている生徒さんに関しては、帰らせるのではなく別の対応をしておりますのでご安心下さい。

【 お知らせ 】

12月よりMACに新しい先生が増えました。教員免許（社会科）をお持ちで、以前小学生から高校生まで指導された経験もお持ちの方です。そして何より子どもたちに対する指導理念がMACにピッタリ合ったので来て頂くこととなりました。

まずは中学部の指導から入って頂き、後には小学部にも入って頂く予定です。
これから、宜しくお願い致します。

12月より、MACにて皆様とともに勉強させていただくことになりました、山田 晃と申します。

私は兵庫県播磨地方で生まれ育ち、地元の学習塾で主に中高生の学習指導をしておりました。その後他業種へ転職し、京都へまいりましたが、民間教育への想いが再燃しこの度の機会となりました。

想いの再燃とのきっかけとなったのは、「社会に出て通用する若者を育てて欲しい」と企業の経営者や管理職の方々から言われたことでした。そして私自身も他業種にて勤務するなかで通用する人というのは、「段取りの出来る人」だと思っていました。

転職を決意して、様々な民間教育の会社を見ましたが、どこも合格実績や生徒増員を目指すような会社ばかりでした。そんな中でMACと出会いました。

MACの田中先生とお話しをさせていただき、結果だけでなく「段取り」を通じて生きる力を育てようという企業理念と、猪飼先生の残された情熱を継承・発展させていくという想いが伝わってきて、我が意を得た気持ちがしました。

MACの生徒達は未就学児や小学校の低学年からしっかりと自分でやるべき事を理解し、厳しく楽しく学んでいます。ズルをして見つかってやり直しをさせられるより、段取りよく正確に課題をこなすほうが早く終わることを知っているのだと思います。

また、教育ツールとしてのそろばんが近年見直されていますが、計算能力の向上・数量の把握といった効能だけではなく、生徒達は少なくともそろばんをするときだけは、きちんと椅子に座り背筋が伸びているのです（そうでないとそろばんが使いにくいと私自身も感じました）。

民間教育に対して、教育の「育」の部分への期待が高まっています。すばらしいシステムと環境の中で、MAC生徒達の人間的成長の手助けをしながら、私自身も成長していきたいと思っています。